

## DRF/Share-Hiroshimaワークショップに参加して

鈴木 正紀

DRF (ダーフ)<sup>(1)</sup> は Digital Repository Federation (デジタルリポジトリ連合) の、Share<sup>(2)</sup> (「シェア」と読む。「シヤレ」ではないので、念のため。) は Shared Repository (共同リポジトリ: モデルと普及) の略である。前者は、「国内における機関リポジトリの発展とオープンアクセス思潮の興隆」を目的として活動するリポジトリ関係者(機関)の連合体であり、その活動は、平成18年から2年区切りで続き、平成20年度で3年目を迎えている。今期の参加機関は86機関に上っている<sup>(3)</sup>。

一方後者は、複数の機関が共同して構築するリポジトリモデル(共同リポジトリ)を普及させるためのプロジェクトである。広島大学が代表機関となり、他9つの機関(国立大学・私立大学)が連携機関として参加している。

筆者が所属する文教大学は、埼玉大学と埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)が共同事業として推進している「埼玉県地域共同リポジトリ」(SUCRA:「さくら」と読む Saitama United Cyber Repository of Academic Resources)の連携機関として、共同リポジトリ構築に参加をしている<sup>(4)</sup>。

DRF/Share-Hiroshima ワークショップは、このDRFとShareが共同で企画・運営した、リポジトリ普及のために開催されたワークショップである。2008年10月29-30日(水-木)の2日間、広島大学を会場として開催された。筆者は2日目のみだが参加をした。上記の通り共同リポジトリ構築に参加する機関として、全国各地で胎動している共同リポジトリの動向を把握し、自らの活動に還元をするためである。

プログラムは、1日目の午後から2日目の午前中にかけては、DRFメンバーを中心に、国立情報学研究所がこの数年行っている学術ポータル担当者研修(実質は機関リポジトリ担当者育成研修)の内容を踏襲した実務研修を行い、2日目の午後にShareが担当する形で、共同リポジトリに関する講演(国立情報学研究所より2つ)、共同リポジトリの事例報告、グループ討議が行われた。共同リポジトリの事例として報告されたのは以下のとおりである。

- (1) 埼玉地区(SUCRA)
- (2) 岡山地区(O-AIR)
- (3) 山口地区(山口県学術機関リポジトリ(仮称))
- (4) 長崎地区(構築準備中)
- (5) 広島地区(HARP)
- (6) 山形地区(ゆうキャンパスリポジトリ)

この6つについては、すでに稼動しているものから、準備中のものまでさまざまである。このワークショップ開催の時点で稼動していたのは、広島と山形の2つであった<sup>(5)</sup>。

この6つの報告により、全国各地でさまざまな背景、事情によって共同リポジトリが稼

動、あるいは立ち上げが模索されている様子を理解することができた<sup>(6)</sup>。

日本国内各地の共同リポジトリについて共通していることは、いずれのケースも地元の国立大学が核となっていることである。しかし、そこからの展開は、県内の大学図書館協議会を検討の場として推進しているケース、県内の大学コンソーシアム（図書館ではない）を場として展開しているケース（山形県がこれに当る）など、地域によってさまざまである。

ただ、いずれにしてもいえるのは、単独で機関リポジトリを立ち上げられるところはほぼ一通り立ち上がり運用がされるようになった次の段階として、資金、人的資源、ノウハウの不足から単独では立ち上げることが難しい機関（多くの場合、中小規模の公私立大学である）が、リポジトリ立ち上げのための環境として共同リポジトリというモデルを選択していることである（もちろん、そこには何らかの推進役が必要であることはいまでもない）。リポジトリ構築への参入障壁を下げる、という効果がそこにはある。

大学図書館関係者の中でも、リポジトリの、特にその継続性について疑問をもつ声は少なからずあるようで、筆者もそうした声があることは承知しているつもりである。しかし、このリポジトリ事業は「続くのか？」ではなく「続けなくてはならない」と捉えるべきものであろう。リポジトリの活動は、世界的な枠組みでは、シリアルズ・クライシスから発生したオープンアクセス運動の一端を担うものであり、また個別機関にとっては、自らの活動を社会に対して公開して行く（視認性を向上させる）ための有効な手段である。このことを大学図書館関係者は積極的に捉え、取り組んでいくことが必要なのではないだろうか。図書館にとっても、そこへの関与は、所属する大学コミュニティの中における図書館の役割の再定義を促すものになるであろう。それは大学図書館にとっての「チャンス」なのである。

Hiroshima のワークショップで感じた参加者の熱気（本音が飛び交ったはずの 1 日目終了後の懇親会に出られなかったことは返す返すも残念であった）は、控えめにいっても、そうした可能性の萌芽を感じさせるものであった。このワークショップは 12 月の山形大学を会場としたワークショップ（DRF/ShaRe-Yamagata）へと引き継がれることになる。

最後に述べておかななくてはならないのは ShaRe の活動への謝意である。本学は共同リポジトリ SUCRA への連携機関として参加することを 2008 年 4 月に決定しながらも、なかなかその実体を作ることができずにいた。担当者（筆者である）が兼務であるゆえの繁忙というのをいいわけとしていた。しかし、そんな担当者の背中を強く押してくれたのが、9 月 29 日に開催された SALA 幹事会における ShaRe と HARP 関係者のみなさんとの情報交換会であった（Hiroshima ワークショップへの参加はこのときの出会いがきっかけとなった）。そこでうかがった数々の話と、幹事会終了後の懇親会での交流は、あれこれ理由をつけて作業を先延ばしにしていた筆者に強いインパクトを与え、11 月 21 日のコンテンツ初登録への道筋をつけてくれた。ShaRe の活動目的である「共同リポジトリの普及」は、埼玉においては間違いなく、大きな成果を上げたのである。

- (1) <http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/>
- (2) <http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/share/share.html>
- (3) DRF ウェブサイトによる。これを含め、詳細は同ウェブサイトを確認いただきたい。
- (4) <http://sucra.saitama-u.ac.jp/> 2009年1月現在の参加機関は、埼玉大学、文教大学、城西大学の3機関
- (5) その後、埼玉が2008年11月21日（文教大学がコンテンツを登録）に移動することになり、また岡山でも2009年1月に環太平洋大学が岡山大学の連携機関として立ち上げることになる。
- (6) このワークショップの概要、報告資料は以下を参照。

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?DRF/ShaRe-Hiroshima>

（すずき・まさのり／文教大学越谷図書館）